

私はこの名を起用しようというのではなく、一度はこんな和名が用いられたことのあることを想起しようといふのである。カミソリグサのおこりは、葉縁の鋸さのためけがをするところからきた方言であったと思う。

○高等植物分布資料 (57) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (57)

○オオヒゲナガカリヤスモドキ *Misanthus tinctorius* Hack. var. *intermedius* Ohwi 本州の多雪地帯の丘陵地に群生するが、これが信州西筑摩郡木祖村の鉢盛山へと南下している。横内氏が1966年8月25日に採集された。この山の西南に奈川の谷を隔てて、ヒメモチの南限である野麦峠がある。 (東京都立大学牧野標本館 水島 正美)

○コウキクサ *Lemna minor* L. 大滝末男氏によれば、北海道の他に、東京、大阪、四国などで知られているが、私は今年(1967年)3月玉名市内で採ったのを始め、6月までに熊本県北部の菊池川下流の平野部一帯で採集した。即ち現在までに荒尾市野原、玉名郡岱明町、横島村、玉名市内各所でかなり多く繁殖しているのをみている。県下の他の地域或いは隣接の筑後川下流域なども調査中なので、今後新らしい知見があればまとめて報告するつもりである。終りに御教示いただいた大滝氏に感謝する。

(熊本大学薬学部 浜田 善利)

□倉田 悟: 続樹木と方言 pp. i—iv, 1—213, 索引 1—10, pl. 4, 挿入写真 35, 地球出版, 1967, ₩750. 前著樹木と方言, 1962年に続くもので、著者が折々の旅行を通じて山村の人々と交流して得た植物とその土地の人々との関係を、隨筆風にまとめた短文または短文集, 38篇がおさめられている。著者の実見のほかに、各地の方言集、民俗誌も多く引用されていて、植物名の語源などについては慎重なアプローチを示している。この方面に関心のある人には必読の書である。 (津山 尚)

□清水大典: 山菜全科 A5, 350 pp. 原色図絵73個、線画135種、3. 8. 1967, 家の光社 ₩480. 米沢市立博物館学芸員である著者の作で、野生で山菜として食用に供するに適するもの135種を、その利用に適する季節の姿で写生してあるが、食べられないもので、食べられるものに似て誤り易いものも比較のため図説してある。その外、食べられるがあまり感心しないものは「本書で取り上げなかった山菜」という条下に、その名称だけを別記してある。表題のような本であるから、全部食用として利用し得るときの状態で写生されてるので、その点一般の図説とは趣を異にしていて、そこが著者の苦心したところで、またそれが著者のじまんであろう。なにはともあれ、山菜料理流行のこのごろ、重宝する人が少なくないだろう。山菜は方言で呼ばれるのが相当にあるので、そこに思いをよせて、各種ごとに方言、つまり地方名を拾録してあるのは、この類の本にはよい企てであった。たのまれてかいた本ではないのはなによりである。 (久内 清孝)